文化

ラテンアメリカの悲劇の根

映画『バロック』に見る冒険の意味

暴力的文明化の二律背反
西欧解体する生命力描く

辻　邦生

（作　家）

人生の折々に〈冒険〉と呼ぶのにふさわしい経験に出逢うことがあるが、私にとって映画『バロック』はそうした〈冒険〉の一つだった。映画『バロック』には、せりふがほとんどない。全篇が音楽であり、それもクラシックからラテン音楽まで、音響とリズムの饗宴といっていい。映像もそれに劣らず華麗であり、万華鏡のような一種の多彩な混沌が支配している。

■魔術的リアリズム

この映画は魔術的リアリズムの作家カルペンティエールの『バロック協奏曲』を原作としているが、普通の意味の原作ではなく、メキシコの監督ポール・ルデュックが、自己の問題意識と想像力にまかせて、自由に原作を変奏したものである。

原作では、財産を蓄えたメキシコ人が、黒人の従者フィロメノを連れて、自分の祖先の地スペインに旅をする。しかしスペインに幻滅した男はさらにヴェネツィアにゆく。折しも水の都ではカーニバルの仮面舞踏で湧き立っている。その陽気な馬鹿騒ぎのなかで、男はヴィヴァルディに逢い、メキシコ最後の王モンテスマがスペインの征服者コルテスに滅ぼされた物語をする。ヴィヴァルディは早速その物語をもとにオペラ「モンテスマ」を作るが、その内容がいい加減なのに腹を立て男はヨーロッパに見切りをつけメキシコに戻ってくる。

『バロック協奏曲』のあらすじはこんなものだが、実は、これだけでは、この小説について何も語ったことにならない。冒頭の、主人公が放尿する音、銀器や骨董（こっとう）品の微細な描写、ヴィヴァルディ、スカルラッティ、ヘンデルの三人が修道女たちと協奏曲を熱狂して演奏するピエタ慈善院、夜明けストラヴィンスキーの墓辺で休む三人のそばを通るワーグナーの柩（ひつぎ）を運ぶゴンドラ――魔術的リアリズムにふさわしい時間空間の混沌のなかで、こうした映像が、いかにもバロックらしい力動感のなかで、描かれているのだ。

■自己同一性の追究

映画『バロック』は大枠としてこのストーリーを用いるが、カルペンティエールが抑制した限界を、ルデュック監督は大胆に越え、映像的にも、音楽的にも、ラテンアメリカの背負う悲劇的性格を、極限まで押しすすめる。このラテンアメリカの悲劇的性格とは文明を暴力として経験しなければならなかったことだ。モンテスマとコルテスの関係がそれを端的に語っている。

暴力としての文明に開化された場合、文明がすぐれたものであっても、文明への憎しみは消えない。文明人となった自己も憎むことになる。文明化への同意と否認――この二律背反のなかにラテンアメリカの苦悩がある。

たとえばわれわれ日本人の場合は、たしかに西欧文明を規範として摂取したが、体質に合致しないものは切りすてることができた。そのため西欧は全的に日本に移されず、和風化され、問題も残した。しかし反面、われわれは伝統と文化を保つことができ、日本語を語り、アイデンティティの存在を疑う必要はなかった。

ラテンアメリカの場合は、ヨーロッパは暴力によって直接に接合された。言葉まで失うほど、文明は全的に強要された。当然、広範な混血が起こった。文明のレベルでは、ラテンアメリカは土着人のものか、ヨーロッパに帰属するのか、混沌として決着をつけることが難しかった。自己表現に用いる言葉が征服者たちのスペイン語、ポルトガル語だった。

日本人なら反西欧の旗をかかげ国粋主義になることも可能だが、ラテンアメリカではそれができない。西欧は身体と魂と一つになっているからだ。

そこからラテンアメリカの独自なアイデンティティの追究が始まる。カルペンティエールの前記作品で、主人公がオペラ「モンテスマ」のでたらめさに腹を立て、ヨーロッパに見切りをつけるのも、メキシコのアイデンティティを発見する一つの契機だろう。

■肉体のリズム謳う

映画では、メキシコの男が夢想する形で、時空を越えた幻想が拡がる。それは、ヴェネツィアの仮面舞踏や慈善院から、スペインと関係する世界史の情景まで――スペイン内戦も含めて――自在に描かれ、基本として、征服者ヨーロッパがラテンアメリカ的なものの中に解体してゆく過程としてとらえられる。たとえばスペイン王宮の十八世紀の典雅な舞踏会は次第にチャチャチャのリズムに変わり、人々はかつらを投げて踊り狂う。シューベルトのセレナーデはダンソンに変わり、肉体の強烈なリズムが謳（うた）い上げられる。

旺盛な南米の生命力が西欧を貪欲に食いつくしてゆくこの変幻する歴史壁画は、それだけで西欧の規範にがんじがらめの日本人に、文化的現実とは何か、という鋭い反省を迫っている。こうした刺戦的な誠実さに触れること、それ以上に貴重な魂の〈冒険〉はありえないように思われる。

（映画『バロック』は東京・吉祥寺バウスシアターで上映中）

『バロック』の一場面